

【6学年のまとめ】

1. 学年の取組

年間計画を確認し、より議論しやすいものを考え「銀のしょく台」を選んだ。案を考えてみたが、指導者には厳しく批判された。案を再考し直したが、「銀のしょく台」で実践することを決意。6学年教員全員で何度も話し合いを重ねた。様々な意見が出たが、議論できるように、①発問（2つに絞る）②教材文（事前に読んでくる）③座席（サークル型で椅子のみ）④板書（登場人物の関係をわかりやすく）に焦点を当てた。授業前には学年で1時間の授業について検討を重ね、1組・3組において授業者による先行授業を行った。授業者は発問を精査することが出来、各クラス担任は児童の授業内の様子や変容を見取ることができた。

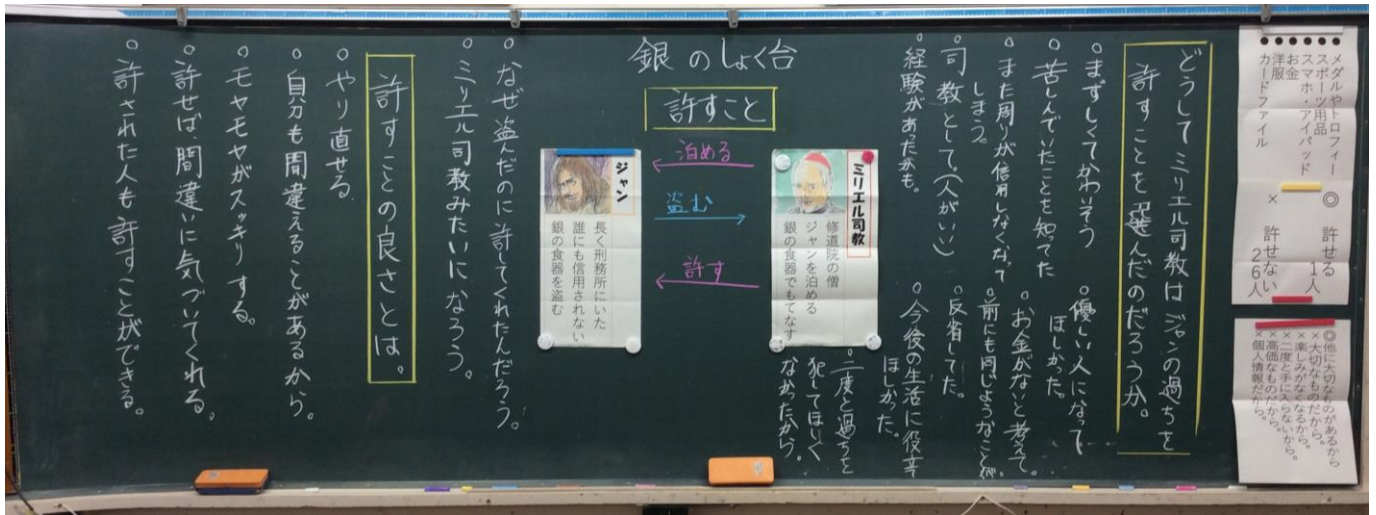
2. 授業実践について

主題 過ちを許す 内容項目【B-（11）相互理解、寛容】

本時のねらい 主人公の行動の意味について語り合い考える活動を通して、過ちを許すことも相手のことを思えば時には必要であると気づき、寛容な態度で人と関わろうとする心情を育てる。

教材名 銀のしょく台（出典『新しい道徳6』東京書籍）

授業者 6年2組 和氣拓巳



【授業の流れ】

- ① アンケートの確認
- ② 教材文の確認
- ③ 発問①（中心発問）
- ④ 発問②
- ⑤ 振り返り
- ⑥ まとめ



発問①を中心発問とし、子供たち主導で自由に議論していった。通常よりも、考えを話す人が、偏った傾向にあった。非日常の感覚が強く、普段通りに意見を言うのが難しかったようだった（振り返りから）。

「どうして許すことを選んだのか」について議論していったが、サークル型というのもあって、話している人の方を見て頷きながら聞くなど、理解しようとしている姿が見られた。また、ペアやグループで話す機会を設けることで、全体では言えない子も他者に自分がどう思っているのかを伝えることができていた。途中、「ジャンの気持ちを考えてみたい」という意見から、問いを立て、ジャンの気持ちを追っていく場面もあったり、どんな意見も板書していったりと、子供たちの興味・関心・意見を大事にファシリテートしていった。

- 人は誰でも、間違いはあるし、ジャンの気持ちのことなども考えたから、許せたのだと思います。
- もし、ミリエル司教が「優しいから」という理由で、許したのだったら、最後にわざわざしょく台まであげることはなかったと思う。やはり、ジャンに改心して欲しかったのだと思う。ジャンが優しくなるなら、銀のしょく台をあげてもいいと考えたのだと思う。
- 注意しないで許すということは優しさなのかな？考えたときもあったけど、ミリエル司教はその人の気持ちをわかっている。許したと知ったとき確かに納得できました。
- 許すことの良さは改心するいいきっかけになる。相手も自分の過ちを振り返ることができる。
- ジャンを許さないとまた同じことを繰り返すだろうと優しさを知って欲しかったのだと思う。
- 過ちをした人にどう対応するのも考えてするようにしたいです。
- 僕も間違えることがあるので、ミリエル司教のように優しくなりたいです。ジャンにいい人になって欲しかったから嘘をついたのだと思います。
- ジャンのとする行動を改めて欲しかったから許せたのだと思います。
- ジャンに過ちをやり直して欲しいと考えたと思いました。
- 許せないことはあるかもしれないけど、ずっとケンカをしてもモヤモヤしてしまったりしてしまうからその時などは一人一人を許せることが大切だと思いました。

指導内容（指導者・鈴木孝雄先生）

- 導入—展開—終末という形でなくても良い。
- 自己の生き方についての考えを深める学習になるように授業を考える。
- 教材文はいつ読んでも良い。（授業前でも休み時間でも好きなときに読んで良い）
- いかに子供が活躍できる授業を創れるか。
- 教えようではなく、ともに学ぶ姿勢で。
- 落とし所を作らない。価値観を押し付けない。合意形成を求めない。
- 価値に迫るのではなく、価値に向き合う時間に。価値観でせめぎ合うことができるように。
- 議論は登場人物のことを話しているときでも、いつの間にか自分の経験を語っているような形が良い。
- 本時でいえば、どちらが中心発問だったのか。
- 子供の活躍の場面→子供の疑問から問いを作っても良い。子供の意見を板書してあげるだけで良い。

3. 成果と課題

- サークル型にすることで、他者の顔がよく見え、よく聴けている様子だった。
- 机を用いず、書く場面を振り返りのみにしたことで、考えることを中心に行うことができた。
- 発問を2つに絞ることで、ゆっくり焦らず、問いについて考えることができた。
- 教師が喋りすぎず、子供たちで話し合いを進めることができた。
- 子供の疑問から問いを立てたことがあったが、それも良いと確認できた。
- 教材文をあらかじめ読んできたことで、話す時間を確保することができた。
- 道徳科以前に普段の学級経営から、どんなことでも安心して言える雰囲気と関係づくりがなされていなければ、そもそも議論もできないと改めて認識できた。
- 今後の学校研究で「議論」をテーマにするのであれば、各教科等と連携を図り、道徳科を超えた取組が必要であると感じた。

▼全体で話せる子とそうでない子、話せない子は「できない子」であるのか？疑問に思う。